

研究、スポーツ、趣味、特技...
学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。
そんなきらりと光る学生を、
同じ学生の目線から紹介する。

酒井詩織

教育学部3年

SAKAI SHIORI



初陣は17位 全日本大学女子駅伝



シード校6校、地区予選を突破した19校に東北学連選抜を加えた計26校が6区間38・6キロの距離を競う「第29回全日本大学女子駅伝」(日本学生陸上競技連合など主催)が10月23日、杜の都・仙台市で行われた。この大会に中四国予選を突破した岡山大学陸上競技部が初出場。最終区間で無念の繰り上げスタートとなり、1本のたすきをつなぐことはできなかったが、2時間18分39秒の17位でゴールした。

1区で最下位と出遅れたものの、2区(6・8キロ)の医学部保健学科4年原田一恵さんが9人を抜き17位に浮上する快走。その後は順位を守った。「5・8キロは長く感じたが、声援のおかげで走り切れた」と1区のMPPコース1年西脇舞さん。最長9・1キロの3区を走った教育学部1年佐藤あずささんは「楽しんで走ろうと思っ

た。笑顔でたすきを渡せてよかった」、スピード区間の4区(4・9キロ)を任された同2年安藤朋恵さんは「中距離が専門で距離に不安があったが、応援を力にペースを守れた」。最終6区の間、同3年渡部友紀子さんは「体調が万全でない中、仲間のサポートでゴールできた」と振り返った。

「入学した時からの憧れの場所。テレビでしか見たことのない遠い存在で、そこに自分が立っていられることがとてもなく幸せだった」。岡山大学として初めて駅伝の全国大会に出場した女子陸上部長距離パートのキャプテン酒井詩織さん(教育学部3年)は憧れの舞台を振り返る。

杜の都・仙台を駆け抜ける「第29回全日本大学女子駅伝」では5区(4・0キロ)を担当。「沿道からOB・OGらの声援がすごくてびっくりした。(レースは)自分との戦いで、応援が本当に力になった。またこの場所に立ちたいと感じた」

9月23日に広島県の道後山高原クロカンパークで行われた中四国予選を勝ち抜き、手にした全国切符。しかし、その道のりは決して平坦なものではなかった。

たすきをつなぐ6人でチームを組めるようになったのはわずか3年前。さらに「国立大学なので強い選手ばかりを集めるこ

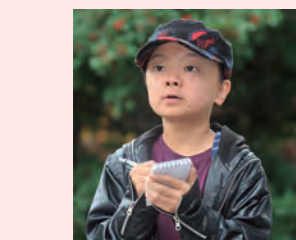
憧れの全国舞台で力走 一役なし、目標達成

ともできず、専任の指導者もない。練習メニューも一から考える。(強豪の)私学の選手たちには考えられないことだと思う」(酒井さん)という状況で、全国大会はまさに夢舞台だった。

練習メニューはキャプテンの酒井さんが他大学の事例などを参考に試行錯誤しながら作成。

限られた時間の中で、それぞれが練習メニューをこなし、親元を離れているメンバーは栄養管理も自己責任で行った。

そんな厳しい環境の中、一時はチームがばらばらになりかけ、悩むこともあったという。その時に心掛けたのが「とにかく一人一人を愛することだけは忘れない」ということ。「信頼関係を築いてこそ、自分の気持ちが届く」と考え、これまで以上に、チームの一人一人に気を配りながらの練習を続けた。そ



インタビュー
岡山大学学生広報スタッフ
法学部法学科2年
安松佳祐

して本番が近づくにつれ、チームはまとまり、初の全国大会で10位台に入るとい目標を見事クリア。17位に入った。

選手と指導者の二役をこなした酒井さん。「競技をしながら指導するのは大変だった。でもみんなでつらいことを乗り越え、チームで団結して同じ目標を目指して走ることが、本当に好きなんです」と話す。

将来は、数学の教師になり、陸上の指導もしたいという酒井さん。「大学時代の経験は、これからの人生できっと役立つと思う」

大学生活での経験を力に、彼女はまだまだ夢に向かって走り続ける。